

セメント産業における 水平的合併と共同事業会社による 生産性と価格への影響

渡部領介*

泉田成美†

要旨

本論文は、日本のセメント産業で 1990 年代に起こった 3 件の大型水平的合併と 1984 年から 1994 年まで存在した共同事業会社が、企業の全要素生産性 (TFP) とポルトランドセメントの価格に与えた影響を分析し、効率性仮説と市場支配力仮説を検証した。その結果、1994 年に起こった 2 件の水平的合併では効率性仮説が支持されたが、1998 年の水平的合併では市場支配力仮説が支持された。一方で、共同事業会社は市場競争を低下させたといえた。以上のことから、共同事業会社の解散によって市場が競争的になり、セメントメーカー各社は効率性を改善する必要に迫られたため、1994 年には効率性仮説に基づく合併が起こったが、1998 年にはその動きも落ち着いていたため市場支配力仮説に基づく合併が起こったと考えられる。つまり、市場が競争的な状況では効率性仮説に基づく合併が起こり、そうでない状況では市場支配力仮説に基づく合併が起こるといえる。ただし合併による価格上昇は短期的であり、水平的合併が市場競争を長期的に低下させたとはいえない。

* 東北大学大学院経済学研究科。日本学術振興会特別研究員 DC。

E-mail: warunabe1984@hotmail.com

† 東北大学大学院経済学研究科教授。